馬場啓一の RKU ウォッチング

RKU Watching

【第27回】

スポーツ健康科学部2年

齋藤真菜さん

（昭和学院高校卒）

バトントワーリング日本一

スポーツ健康科学部2年生の齋藤真菜さんは、これまでバトン・トワーリングの各種競技で全国トップの成績を収めてきた。本学期待のホープである。

「6歳のときから始めました。なんとなく、という感じでした。でも小さい頃からダンスとかは好きでしたね。ご近所に教えて下さる人がいて、友達と、ちょっとやってみようか、という軽い気持ちで始めたのです」

今では最低でも1日3時間、週末には6時間から8時間もの練習を行う。練習の鬼なのだ。

「だから休みの日に何かをする、というようなことはないのです。もし好きなことをやるとしたらアウトドアのスポーツでしょうね」

徹底した体育系女子である。でも見た目は可愛い、フツーの女子大学生である。

「バトントワーリングには数百種類のワザがありますが振り付けは自由で、先生と相談しながら、付けていきます」

競技は、個人と団体に分かれ、個人では1曲につき1分30秒。団体では、3～4分。種目数も多く、ご存じの方も多いだろうが、男子の部もあるという。

「男子は、女の姉妹がやっていたから、という理由での始め方が多いですね。10点満点の持ち点でスタートし、減点法で点数が決まります」

バトントワーリング競技において求められる特質は一体なんだろう。

「やはりパワーと度胸です。フィギュア・スケートと同様、見栄えの良さが要求されます。それと、両手で操るバトンの技術との相乗効果で点数が決まります」

器用さと度胸の良さ、それに運動神経が総合して、競技は完成される。

●齋藤真菜／さいとう・まな

宮城県仙台市生まれ、千葉県市川市に在住。フェアリーズバトンスタジオに所属。

小学6年生から全国大会に連続8回出場し入賞。今年大学一般部門で全国女子1位。世界大会は14歳で初出場。今年も8月にカナダで開催される世界大会日本代表に3種目選出。団体は高校時代昭和学院バトン部に所属し3年連続全国出場。

Mana Saito × Keiichi Baba

「勿論これは競技のときで、普段はイベントのパレードで先頭を受け持っています」

我々がしばしば目にする光景である。こういう場面で、大いに花を添え、盛り立てる役割を担っている。

「それからエキジビションも大事なお仕事。フィギュア・スケートでもありますよね。イベントの途中でバトントワーリングの演技を、お客様に見せるのです」

盛大な拍手を送られると嬉しい。あんなこと、とても自分にはできないという表情で、お客さんは驚嘆して見ている。

「将来は体育教師を目指しています。そして後進の指導に当たりたいです。負けず嫌いだからゼッタイ実現させます」

国際競技で世界中を廻る。練習も激しい。学業との両立はたいへんだろうが、貫き通して欲しい。

「対抗勢はオーストラリアとかカナダ、それにフランス。そういう国が強いです。アジアはまだ、少ないですね」

両手の親指と人差し指の間に、それぞれ硬いタコが出来ている。これまでの精進の、これが結果だろう。手は大きいほど、良いのだという。

「片手でバトンを上に放り、それを受け止めてクルクルと回します。これを一日千回繰り返すのです。右手と左手の両方で」

……頑張ってください。